

# 復元大窯の焼成品について

加藤 正

## 1. 試験体の材料と釉薬

今回の焼成にあたっては、室町時代当時に使用されていた材料、成形方法などを用いることを第一義とし、これまでの調査に基づいて材料、原料を入手した。

粘土は、美濃の五斗蒔粘土・大萱粘土、瀬戸の南山粘土・荒目の蛙目粘土を主として用い、他に常滑の粘土、信楽粘土、当館敷地内採集粘土二種類と黄土を加えることとした。

釉薬は、主体試験釉として、桃山陶の志野釉を選び、他に初期の灰釉、黒釉、青織部釉、黄瀬戸釉、御深井釉を掛けることとし、特別試験品として、無釉陶をも考慮した。志野釉については、筆者は、すでに5～6年前から原料の採集やその試験を行ってきており、粘土、陶石、鬼板、黄土などは、美濃の隠居山・久々利、瀬戸の南山・山口などで採集していた。この原料をもとに、瀬戸周辺の窖窯での焼成があるたびに、5～6個の試験体を入れ、実験を繰り返して来た。その結果をもとに、大窯での主体試験釉を志野釉としたものである。

採掘した粘土は、個々に水篩し、あるいは砂こして練り上げ、貯蔵した。成形は、ロクロ成形と手造り成形（ヒモ造り、タタラ造り、削り出し）を行った。

仕上げは、糸底をそのまま残したり、木刀を使ったりして、当時の造り方を踏襲した。

試験体の種類は、花瓶・一輪差し・水指・菓子器・抹茶碗・置物・水滴・盃・湯呑・小鉢・皿・飯茶碗など食器類と茶陶類である。（試験体は、水切れ、割れを防ぐために、全て素焼を行った。）

釉薬調合は、最も古い調合を採用し、志野釉は長石のみ、織部は千倉と木灰と銅へげ、黄瀬戸釉は長石と木灰・藁灰と黄土を用いた。

土と釉の組み合わせは、もぐさ土に志野釉と黒釉、南山粘土に織部釉・黄瀬戸釉・黒釉、信楽粘土に灰釉・無釉、常滑粘土は無釉、五斗蒔粘土は織部釉・御深井釉・灰釉、当資料館粘土のうち、一つは無釉、他の一つは左馬茶碗に御深井釉とした。

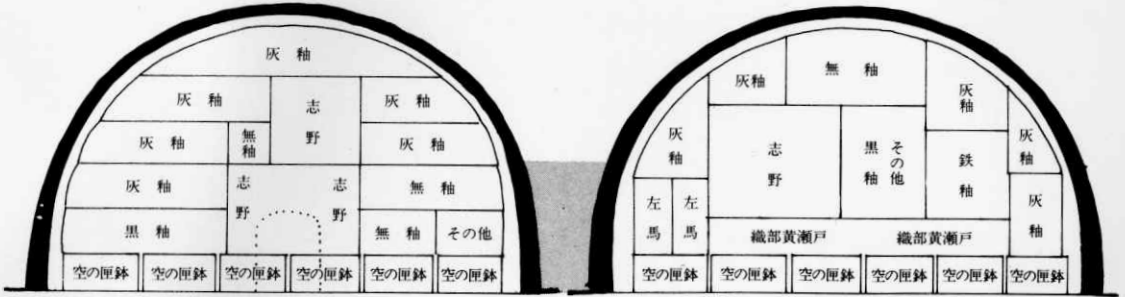
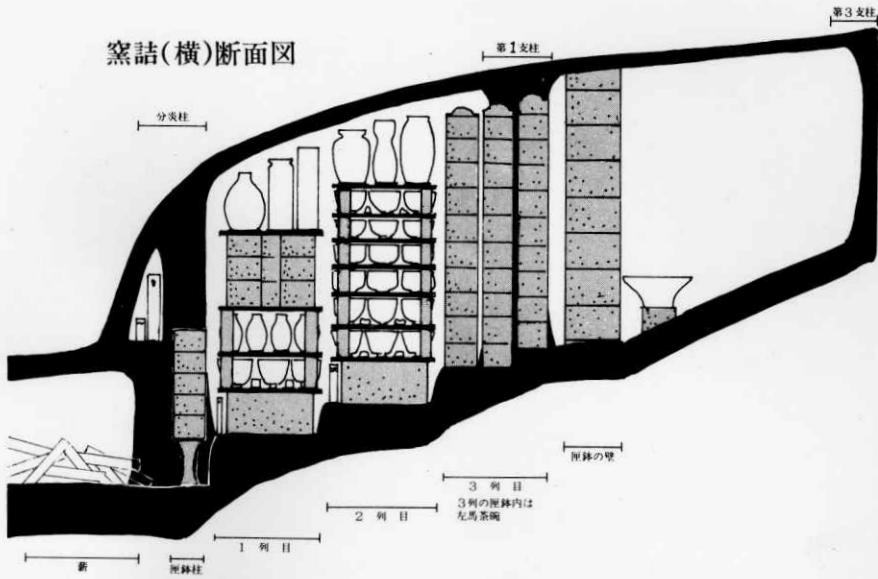
## 2. 窯詰め留意点（挿図参照）

- (1) 窯床から30cmの高さまでは捨てる。
- (2) 分焰柱の後から第1支柱までの150cmを焼成室とした。
- (3) アーチと試験体の隙間は10～15cmとした。
- (4) 分焰柱の両脇の狭間を構成する小円柱上に匣鉢を70cmの高さまで積み、狭間孔とした。その間隔は4cmとし、壁にむかってやや広げ、最終間隔は10cm以内にとどめた。また、第1支柱の後に空匣鉢を一列に立て、焼成室の窯壁とした。

以上のことに留意し、次のように窯詰めした。

1列目は空匣鉢の上に棚積みで黒釉、無釉、その上に匣鉢に入れた志野を積む。上段は、棚積みの灰釉を入れた。

2列目は、空匣鉢の上に棚積みで織部、黒釉などを入れた。中段は、棚積みと匣鉢を併用して志



窯詰1列目断面図

窯詰2列目断面図

(挿図) 窯詰め概要図

野を積む。最上段は、灰釉、無釉を入れた。

3列目は、全て御深井釉を掛けた左馬茶碗を匣鉢詰めにし、横3列に並べ積み上げた。

### 3. 焼成品

ほぼ良好な仕上がりであった。

火前の鼠志野には秀品があった。志野は、8割方、釉が溶け過ぎのきらいはあったが、平均して緋色の出もほどよく、良好であった。

窯の最上段に入れた灰釉は、6割方、釉が流れたが、自然灰の付着もあり、面白い物が多かった。

黒釉は、良好で、鎌倉・室町時代の半つやの天目黒とほぼ同じ結果が出ている。

青織部や黄瀬戸釉は、釉結晶が出て、異なった釉にみえるものが出た。無釉陶は、自然灰が掛かって良く、御深井釉をかけた左馬茶碗も淡いピンク掛かった緋色が出て、唐呉須の発色も良好なものであった。

今回使用した粘土は、全て良好なものであって、火色のやわらかいものとして、もぐさ土と当館左馬使用粘土、次いで五斗蔞土と南山土、やや緋色の強いものとして信楽土と常滑土という結果が出た。